

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 チェーホフ 『桜の園』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

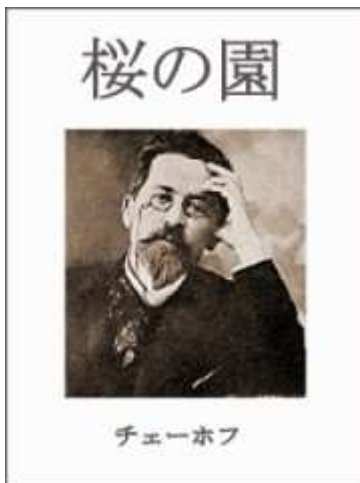
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9YKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 73 回のツイキャス読書会の課題図書は、田山花袋 『蒲団』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『桜の園』感想文

最初、ロパーヒンは昔自分より身分が上のラネーフスカヤ婦人に親切にもらった事に恩義を感じていて、桜の園を手放さなくていいように助言をしてあげていて良い人だなと思いました。

でも、ラネーフスカヤ婦人からすれば、自分より身分の低い人からそんな事を言われても受け入れられないという事もあったのかな？ と思う。

庶民の私には分からないけど、上流階級のプライドがそうさせたのかな？ と思いました。

貴族や上流階級の人たちが偉いとは思わないけど、ただお金を持ってるけど、中身空っぽな感じもどうなのかな？ と思いました。

誰でも力を手にすると傲慢さが出てくるのかもしれませんが、ロパーヒンはまるで先祖からの怨みをはらすみたいになっていてがっかりしました。

ロパーヒンが、そんなにお金を持っているなら素晴らしいと言われる桜の園をそのままにして欲しかったけど、世の中が変わって行くときには素晴らしい物も無くなってしまう事があるという事なのかなと思いました。

桜の園にラネーフスカヤ婦人や兄のゲーエフは縛られていてそこから動けない状態のように感じられて結果的には無くなって良かったのかもしれないけど、少し淋しく感じました。

(おわり)

アーニヤの目覚め。革命の夜明け前。

母も伯父も頼りにならない、と
アーニヤはいつ気づいただろう。

母たちと一緒に故郷へ戻り、5年ぶりに会う面々。
アーニヤは、道中四晩も眠れないまま懐かしい我が家へ帰ってきた。
この家はどうなってしまうのだろう。不安を抱えたまま、その晩も眠れない。
なぜなら聞こえてくる大人たちの会話はどこかちぐはぐしていて噛み合っていないから。

—第二幕—

不意にはるか遠くで、まるで天からひびいたような物音がする。
それは弦の切れた音で、しだいに哀しげに消えてゆく。

アーニヤの感性にひびいたこの音は、家の終わりを告げていた。
目に涙をためてなにか言おうとするけれど決して泣かない。

「わたしたちの今住んでいるこの家は、もうとうにわたしたちの家じゃないのよ。
だからわたし出て行くわ。誓ってよ」

アーニヤは次の時代を見ていて、過去の栄光や思い出に縛られない。新しい生活にわくわくし、すばらしい世界を夢みている。家へ戻ってきてからの数ヶ月で、アーニヤは目覚め、ずいぶん成長したように感じられた。心のどこかで、桜の園が売られてしまってもいいと望むくらいに気持ちが変わった。

「なぜわたし、前ほど桜の園が好きでなくなったのかしら？」
と、トロフィーモフに話す。母のように天真爛漫には生きられない没落する貴族家系の宿命がある。

「ペーチャがね、階段から落っこちたの！」
トロフィーモフは人類最高の幸福を目指してモスクワへ旅立ち、あのあと革命を見たのだろうか。もしくは革命の最前線にいらただろうか。そう考えるとわたしには「桜の園」は喜劇だとは思えなかった。

「さようなら、わたしの家！ さようなら、古い生活！」

アーニヤが次の時代を担うのだ。シニカルな笑いに込められた自嘲や自戒の中に、アーニヤの儂い希望が輝いていた。それがとても印象的だった。

(おわり)

「夜は××思いっきり電話」

テレビスタジオ 壇上中央にホワイトボードがあり、その前に肌の黒い司会進行の男が電話を持って立っている。ホワイトボードの前ではアシスタント女性が電話の話の内容を書き込む。

壇上右手には4人のタレント。スタジオ内に客席があり、多くの女性観覧者が座っている。

電話口ですすり泣く女の声

司会「奥さん、私ダメなんですって泣いてたって始まらないよ。今伺った話を一度まとめますから」

テレビカメラ ホワイトボードの文字を写す。

アシスタント「相談者はRさん女性、ロシア在住。二人の娘さんとお兄さん、その他召使いや家庭教師さんと暮らしています。

自分の浪費癖で代々続く美しい桜の咲く土地と家が競売にかけられてしまい今後どうしたら良いのだろう、という内容です」

客席 神妙に「う～ん」

お笑いタレント「貴方の浪費癖というのはどんなですか？」

相談者「家に將軍様など呼んで舞踏会を開いていました。借金が出来ても舞踏会を開いてしましまして。でも今は町の郵便局長位の人達しか来てくれません。その方々もあたまいい顔はして来てくれません。

それに私ったらよく分からないホームレスみたいな人が困っているから銀貨をお恵みくださいって言ってきたんです。でも持ち合わせがなくて」

お笑いタレント「それは断ったんですよね？」

相談者「いえ、金貨があったのでそれを渡してしました」

客席 驚きの声

歌手「その土地や建物はどんな方が落札したんですか？」

相談者「うちに出入りしてる商人で、彼の家は代々うちの農奴でした」

歌手「恨みがこもっていそうですね」

客席 頷く

女優「娘さん達はなんて仰ってますか？」

相談者「一人の子は、彼氏がいるんですけど、老け顔の大学生の。その彼も一緒になってまた新しく自由に暮らそうって」

女優「もう一人の子は？」

相談者「田舎の町の家で家政婦になるそうです。彼女は私の養女なんです」

女優 ハンカチで涙を拭う。客席にも泣いている人多数。「お辛いですわね。他の召使いの方は？」

相談者「ここは嫌だから私について来たいっていう人もいれば、この桜の園を買った商人に雇われたものもいます」

女優「まあ！」

女方舞台俳優 語気を荒げて「ちょっといいですか。幾らあんたが浪費家だからって、他に何かあるんじゃないの？例えば男に貢いでいるとか」

相談者(間)「ええ、実はパりに」

客席 驚きの声

俳優「ダメだこりゃ」

司会者「日本でも戦後農地改革で太宰治の実家が没落していったなんて話がありますよ。

いいですか奥さん。確かに貴方の家は農奴解放して段々没落して行って、先程からあるように浪費癖もあってかつて親交のあった偉い人達も遠ざかって行ってしまった。それでも桜の園を守りたいって気持ちは分かりましたよ。

まずは自分が貧乏だと受け入れなさいよ。その貧しい貴方が持っている全てのお金をホームレスの人にあげたわけでしょ？まるで福音書に出てくるみたいな話じゃない。

そして娘さんや娘の彼氏が言う通り、自由になったんだと思って、家を捨てたんだ、出家したんだと思いまた新しい庭を作ればいいじゃない。二十二の不仕合せの次に何かがあるかもしれないよ」

「はい」と言いながらすすり泣く女の声。

電話の向こうから何か弦のようなものが切れた音がする。

司会者「今何か聞こえたけど、どうしたの奥さん、奥さん。

(間が空いて)じゃあここでお知らせ入れます」

客席から拍手が起こる。次いで桜の木の周りで遊ぶ子供達のカットで始まる中国資本に買収された不動産会社の CM が流される。

「リゾートマンション ガーデン チェリーブLOSSAM、分譲受付開始」の字幕。

(おわり)

「ワーリヤとロパーヒン」

この作品は短編でありながら、身分、生い立ち、仕事、思想の違う多くの個性的な人物が登場し、その関係が書かれていた。私がこれらの関係の中で一番興味を持ったのは、ワーリヤとロパーヒンの関係である。二人は結婚すると傍から思われていたのに、実現しなかった。その原因は何かは私は気になり、二人のセリフと行動に着目して、読み取りを行った。そして、「二人は話の始まりから愛し合っていなかった。」という結論に至った。この考えに及んだのは以下の箇所の読み取りからである。

① 「私思うのよ。これは結局どうにもならない話だって。あの人は仕事が多いから私どころじゃないの」1幕

なんと、結論をワーリヤ自らが早々と作中で述べていた。こんな大事なセリフを見落としていたのは恥ずかしい限りである。言い訳になるが、ラネーフスカヤの「ロパーヒンはあなたを愛しているわ。」と言うセリフの方を、私も他の登場人物同様信じてしまったようだ。

② 「オフィーリア、ささ尼寺へ」2幕

オフィーリアは、作品の中で「相手に愛されていると妄想的確信を抱いていた女性」と言われている。作者はロパーヒンにこのセリフを言わせることで彼の本心を観客に伝えようとしたようだ。これは、作者の考えた伏線だと思う。おそらくロパーヒンは、ラネーフスカヤを敬愛していたので最後まで、彼女の気持ちを無にできなかったのだろう。しかし身分は逆転し、今や財力も権力も得、今後も、仕事に人生の価値を求める彼にとって、自分を下の身分にみるワーリヤは必要なく、自分の本心に従ったのだろう。では、ワーリヤの片思いであったのだろうか？私は、次の箇所の読み取りからそれも違うと思った。

③ 「わたしが買いました」(ロパーヒン)

ワーリヤはバンドから鍵束をはずしそれを客間中央の床へ投げつけて退場。3幕

愛する人が買ったことに腹を立てているのが読み取れる。ワーリヤのこの様子に、ロパーヒンは彼女の本心が透けて見えたに違いない。しかし、ワーリヤ自身はまだこの時点では、自分の本心に気づいていないように思えた。

④ 「さっさと持って行って頂戴。この汚らしいもの」4幕

ロパーヒンの話し声が聞こえた時の彼女のセリフなので、この靴はロパーヒンの物であり、彼に行った言葉だと推察できる。ロパーヒンへの怒りが読み取れる。それなのに彼女は尚、彼のプロポーズを聞きたがった。これはなぜだろうか？

⑤ 「私は、これからすぐハリコフへ発ちます。(略)あの男を雇ったのでね。」

このセリフの後で彼女は号泣している。ここから、彼女が愛していたのは、屋敷と家計を預かる主婦という身分であったことを私は確信した。ここでの彼女の涙は彼との別離によるものでなく、家との別離によるものだったに相違ない。

二人が愛していたものは、最初から違っていた。それがはっきりしてこの別れも良かったのではないかと私は思う。

(おわり)

「桜が散っているのではない、人が散っているのだ」

ラネーフスカヤ夫人は、桜の園を手放して、大都会パリにて死にかかっている愛人のもとに帰った。

そして、成金ロパーヒンは、とうとう競売で落札した。それは、農奴であった祖父がこき使われていた桜の園であった。

(引用はじめ)

アーニヤ、あなたのお祖父さんも、ひいお祖父さんも、もっと前の先祖も、みんな農奴制度の讃美者で、生きた魂を奴隷にしてしぼり上げていたんです。で、どうです、この庭の桜の一つ一つから、その葉の一枚一枚から、その幹の一本一本から、人間の眼があなたを見てはいしませんか、その声があなたには聞えませんか？

(引用おわり)

財産権や所有権が特権階級のものであったとき、資本が、一部の階級に独占されたとき、生きた魂は、市場経済の中で、ぎゅうぎゅうと搾り取られ、その分だけ、桜の園は、勢いをまして、ますます美しく咲き誇る。

坂口安吾の『桜の森の満開の下』は、鬼と化した女を、男が絞め殺すシーンで終わっている。
ロパーヒンとラネーフスカヤの関係を少し彷彿とさせる。最終部分のこの文章。

(引用はじめ)

彼は女の顔の上の花びらをとってやろうとしました。彼の手が女の顔にとどこうとした時に、何か変わったことが起ったように思われました。すると、彼の手の下には降りつもった花びらばかりで、女の姿は掻き消えてただ幾つかの花びらになっていました。そして、その花びらを掻き分けようとした彼の手も彼の身体も延した時にはもはや消えていました。あとに花びらと、冷めたい虚空がはりつめているばかりでした。

(引用おわり)

日本の桜の園は、日本のものだ。

満開の桜は、日本の繁栄の象徴だ。繁栄は、多くの人の生きた魂をぎゅうぎゅうぎゅうと絞り、その滋養によって、一斉に、咲き誇り、一斉に、散る。

1945年の上野の森。東京大空襲の焼死体が集められた空の上に、咲き渡る満開の桜を、安吾は観たそうだ。

花びらに埋まる焼死体の山。終わりのはじまり。没落する現象。生命の核心。冷たい虚空。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343